

OfByForコラム 地域の 地域による 地域のための Something NEWS

第⑧回

農民作家・遠山あきが 伝える自然エネルギー

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人 e f c o . j p

代表理事

佐藤建吉

▼農民作家・遠山あき

千葉県原市や大多喜町など地域に密着した小説や随筆を多数著述した農民作家、遠山あき（1917～2015年、没前2006年、大学院98歳）は、多角的で奥深い視点を持つ女流作家である。

遠山氏は、筆者が現在、活動の場として千葉県大多喜町の老川小学校（現在は廃校）のグランド下手の職員住宅で、誕生した。父上は、山口内蔵助氏で、老川小学校の訓導（当時の教師のちには校長）であった。遠山氏は、千葉女子師範学校を卒業後、同僚教師と結婚、30歳で退職、農家の切り盛りと文筆活動を両立した。1976年の『旅立ちの朝』で千葉文学賞受賞を皮切りに、多くの文学賞や功績賞を受賞されている。筆者は、生前10年ほど

わいの絶頂であった。実は老川は、養老川の最も上流の基地であった。遠山氏は養老川に沿う道を、父と歩いた時の思い出を記述している。

父「この下に発電所があるんだ」

「その後の施設はそのまま放置されていたが、昭和43年（1968年）にへ大多喜町菅水道として蘇った」

この水力発電所は、2014年に小水力発電所として「面白発電所」リプレイスされた¹⁾。

「追記」 地域を題材にした作品や、地域中心の活動などの芸術表現が一堂に会した「いちばらアート×ミックス」(2017年4月8日～5月14日)において「遠山あき」展が開催された。会場は旧・白鳥小学校(市原市大久保)。

「それは、養老川粟又の滝の下流2000m、老川面白というところの谷川にあった。大正12年（1923年）4月が起工で、大正15年（1926年）10月に竣工した。工事費は、35万円との記述がある。出力は140kwで、フランシス水車が2台、発電機1台であった。遠山氏が父とこの発電所を見たのは昭和3年（1928年）ごろであり、「関東配電老川発電所」と呼ばれていた。この発電所は、白ペンキ塗りの洋風の平屋の建物で、当時はモダンであった。その配電区域は、大多喜町と隣市の市原の一部までであった。遠山氏は、「大正の末期、科学文化の波は、この山深い養老川上流にも文明の光を灯したのである。上野での内國

それは、養老川粟又の滝の下流2000m、老川面白というところの谷川にあった。大正12年（1923年）4月が起工で、大正15年（1926年）10月に竣工した。工事費は、35万円との記述がある。出力は140kwで、フランシス水車が2台、発電機1台であった。遠山氏が父とこの発電所を見たのは昭和3年（1928年）ごろであり、「関東配電老川発電所」と呼ばれていた。この発電所は、白ペンキ塗りの洋風の平屋の建物で、当時はモダンであった。その配電区域は、大多喜町と隣市の市原の一部までであった。遠山氏は、「大正の末期、科学文化の波は、この山深い養老川上流にも文明の光を灯したのである。上野での内國

「その後の施設はそのまま放置されていたが、昭和43年（1968年）にへ大多喜町菅水道として蘇った」

この水力発電所は、2014年に小水力発電所として「面白発電所」リプレイスされた¹⁾。

「追記」 地域を題材にした作品や、地域中心の活動などの芸術表現が一堂に会した「いちばらアート×ミックス」(2017年4月8日～5月14日)において「遠山あき」展が開催された。会場は旧・白鳥小学校(市原市大久保)。

「追記」 地域を題材にした作品や、地域中心の活動などの芸術表現が一堂に会した「いちばらアート×ミックス」(2017年4月8日～5月14日)において「遠山あき」展が開催された。会場は旧・白鳥小学校(市原市大久保)。

▼養老川水力発電所

養老川は大多喜町が源流となっており、千葉県の市原市に河口を持ち、市原市を縦断している。今から50年以上前は、木炭を運ぶための水運が盛んであったという。その積

この水力発電所は、2014年に小水力発電所として「面白発電所」リプレイスされた¹⁾。

「追記」 地域を題材にした作品や、地域中心の活動などの芸術表現が一堂に会した「いちばらアート×ミックス」(2017年4月8日～5月14日)において「遠山あき」展が開催された。会場は旧・白鳥小学校(市原市大久保)。

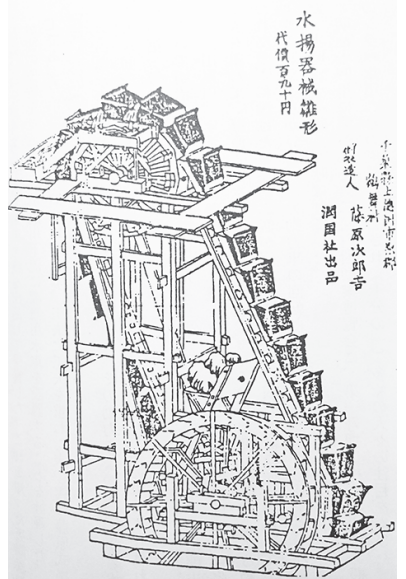
「追記」 地域を題材にした作品や、地域中心の活動などの芸術表現が一堂に会した「いちばらアート×ミックス」(2017年4月8日～5月14日)において「遠山あき」展が開催された。会場は旧・白鳥小学校(市原市大久保)。

「追記」 地域を題材にした作品や、地域中心の活動などの芸術表現が一堂に会した「いちばらアート×ミックス」(2017年4月8日～5月14日)において「遠山あき」展が開催された。会場は旧・白鳥小学校(市原市大久保)。



▶遠山あき氏の地域作品 (NHKテレビS台本)

「それは、養老川粟又の滝の下流2000m、老川面白というところの谷川にあった。大正12年（1923年）4月が起工で、大正15年（1926年）10月に竣工した。工事費は、35万円との記述がある。出力は140kwで、フランシス水車が2台、発電機1台であった。遠山氏が父とこの発電所を見たのは昭和3年（1928年）ごろであり、「関東配電老川発電所」と呼ばれていた。この発電所は、白ペンキ塗りの洋風の平屋の建物で、当時はモダンであった。その配電区域は、大多喜町と隣市の市原の一部までであった。遠山氏は、「大正の末期、科学文化の波は、この山深い養老川上流にも文明の光を灯したのである。上野での内國



第2回内國勸業博覧会で展示された設計図

「追記」 地域を題材にした作品や、地域中心の活動などの芸術表現が一堂に会した「いちばらアート×ミックス」(2017年4月8日～5月14日)において「遠山あき」展が開催された。会場は旧・白鳥小学校(市原市大久保)。

*1: この話題は、本紙連続コラム「エネルギーの源」第2話で紹介した
*2: 『養老川雑記』(風のうた・II) (1992年初版、審書房発行)